
特急列車のアリバイ

鷲原シュン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

特急列車のアリバイ

【Nコード】

N6330S

【作者名】

鷲原シュン

【あらすじ】

箱根に行くコナンたちはそこで旅番組の撮影スタッフと出会ったところがそのスタッフ達がある事件に巻き込まれてしまう果たしてコナンは事件の謎を解き明かすことが出来るのか

出会い

小田急ロマンスカーの車内

コナンたちは箱根の温泉旅館に向かう特急列車に乗っていた

「楽しみだね、箱根」

「うん」

蘭とコナンがパンフレットを見ながら微笑む

「ま、それもこの眠りの小五郎さまがクロスワードパズルを解いて見事当選したおかげだがな、だーっはっは」

「（パズルの文字埋めたのは俺だけだな）」

「おじさん、そこカタツムリじゃない？」

「お、なるほど」

町田駅を出たところで誰かが車内にやってきた

「あれ？もしかしてはるみさんじゃない？」

「本当だ、それにほら、カメラ持ってるの木宮さんよ、ほら、植樹のときの」

振袖般若のときの深津はるみさんがテレビクルーと思われる人物たちとともに入ってきた

木宮さんに関しては作者の小説「ちびっこアイドルの悲劇」参照

「あら？もしかして毛利さん？」

はるみさんが席の前を通り過ぎる時こちらに気がついた

「え？毛利ってあの名探偵の？」

「あ、どうも、私が、名探偵の毛利小五郎です」
背広を直しながら名乗る小五郎

「はるみさん久しぶりですね、木宮さんも」

「木宮さん知り合いだったの？」

「前にちよつと事件でね、そういうはるみさんも」

「ええ、私もちよつと事件で」

はるみさんと木宮さんが話していた

「それで、はるみさんはどちらに」

「ええ、旅番組の仕事でこちらの久保さんと箱根のほうに」

「久保………というともしかして、肉体派俳優の久保長作」

ガタイのいい男性が前に出る

「どうも、久保長作です、お噂はかねがね」

「どうも、あ、久保さん、紹介します、娘の蘭と居候のコナンです」

「（だから居候は余計だつて）」

「では私のほうからはスタッフを紹介します、はるみさんと木宮さんはご存知のようですから………」

木宮さんの陰から女性一人、男性二人が出てくる

「左から音声の前田衛さん」

「どうも」

「それと照明の近藤為史さん」

「よろしくおねがいします」

「さいごにディレクターの鶴見翼さん」

「どうも」

「いやー、こんなきれいな方がディレクターとは」

そう言つて小五郎がデレデレするので蘭が後ろからアキレス腱をけつた

「つ~~~~~!」

「お、ちよつどいいですね、われわれの席、毛利さんたちのすぐ後ろですよ」

そう言つて近藤さんが座ると隣に前田さんも座つた

この列車は2シートなので鶴見さんはその更に後ろ

はるみさんと久保さんが隣り合わせに座つた

「それで、毛利さんたちはどちらへ？」

久保さんが後ろの座席から覗き込んで訪ねた

「箱根のスパリゾートです」

「もしかして小涌園の？」

「ええ、まあ」

「私たちもそこに行くところなんですよ」

はるみさんが手を合わせ嬉しそうにほほ笑む

箱根のとあるスパリゾート

「おつかれさまです」

「とりあえずここでの撮影はいったん終了、次の撮影は夕食のときにします」

鶴見さんの一声でスタッフの皆さんが一斉に散った

蘭、コナン、はるみさんはドクターフィッシュと呼ばれる魚の入ったプールに入っていた

「はは、くすぐりたい」

「（確かにこれはくすぐりたい）」

そうコナンが呟いてる中彼の足にも魚が集まっていた

一方小五郎は久保さんと一緒に入っていた

「いやー、さすが肉体派俳優、いい体してますな」

「そういう毛利さんは、何かスポーツはされるんですか」

「こっに見えてもわたくし、大学時代に柔道をやってたんですよ」
などと談笑している

スタッフの皆さんは打ち合わせをしていた

「乾杯してもらって久保さんの奥さんの話題でも出してもらいましょうか」

鶴見さんが笑いながら提案する

「嫉妬深いですからね、久保さんの奥さん」

「そのせいで最近仲悪いつて噂ですよ」

と、木宮さんと近藤さんが何気ない話をしていた

夕食時

「あれ？毛利さんじゃないですか」

はるみさんが演技しつつ小五郎たちを席に招く、偶然を装うつもりだろう（本当に偶然だけど）

そして鶴見さんからカンペで指示が

「蘭さんを久保さんの隣に座らせてください」と

「あ、久保さんどうぞ」

「あ、これはどうも」

小五郎が正面に座っている久保さんに酌を注ぐ（奇数だから正確には正面とは言えないが）

「しかし、こんなに素敵な女性に囲まれて妻に何言われるか不安でしょうがない」

「久保さんの奥さんという元女優の」

「ええ、石田みずきです、今は久保みずきですけどね」

「久保さんの奥さん結構嫉妬深いんですよ」

はるみさんが話を振ったので久保さんが小突く

「仕事で女性と話したっただけでにらんですからね、いや怖い怖い」

と、久保さんも苦笑い

「（あ、でも久保さんの奥さんの気持ちわかるかも）」

と、心中でうなずいた人がいたとか、誰とは言わないが

そしてその翌日、事件は起きた

撮影から戻って帰宅した久保さんが風呂場で死亡している妻を発見

したのだ

捜査

風呂場で鑑識が遺体を撮影していた

「被害者は久保みずき、39歳、元女優か」

神奈川県警の横溝警部が遺体を見ながらつぶやく

「索条痕や吉川線があるところをみると他殺とみて間違いないか、死因は頸部圧迫による窒息死、凶器はこのロープか」

そういつて風呂場の蛇口につないであるロープに触れる横溝警部

「死亡推定時刻は昨日の午前10時前後、その時間被害者の夫である久保長作さん、あんたはどこに」

そういつて横溝警部がうしろで待たせていた久保さんに問う

「その時間私は仕事でロマンスカーの車内に」

「ロマンスカーってというと小田急の特急列車か、チケットは」

そういつて久保さんが特急券を取り出して横溝警部に渡す

「10時1分町田駅発のロマンスカーか、この電車にあんたが乗ったってという証拠があればアリバイは一応成立だな」

「アリバイって、まさか私を疑ってるんですか！」

「ま、あんたはそのスタッフたちと一緒に乗ったっていつが……」

そういつて久保さんの後ろにいるスタッフたちをみる、証人として呼んであったのだ

「ここはあんたの家だ、なんかしらのトリックで死亡推定時刻をずらせよ」

「無理だと思えますよ、その日は町田の健康ランドに泊まりましたから」

「なんで健康ランドに？ここは相模大野だぜ、町田にだつたらすぐ行けるだろ」

横溝警部の疑問に鶴見さんが答える

「久保さんは撮影の前の日にいつも集合場所の近くに泊まるように

してるんです」

「あ、私が泊まった健康ランドはここです」
そう言っただけが書いた紙、おそらく健康ランドの住所が書かれて
いるのだろう

「おい、警視庁に頼んで確認を取ってくれ」
町田市は東京都なので横溝警部は管轄外です

「でもなんだろうね、この発泡スチロール」
そう言っただけでコナンが被害者が横たわっていた風呂桶を覗き込む
確かに遺体の下には発泡スチロールが敷いてあった

「おい坊主、あんまり余計なところ触るんじゃねーぞ」
と、横溝警部が怒鳴ったところで何かに気づく
「ってなんであんたらまでいるんだ」
スタッフやはるみさんに混ざって小五郎たちもいた

「何って、われわれも証人ですよ、ロマンスカーの車内で偶然一緒
だったんでね」

小五郎の答えに頭を抱える横溝警部だった

警官二人がかりで遺体をどかして現場保存を済ませたところでコナ
ンが発泡スチロールを覗き込む

「(ん?)」
するとコナンは発泡スチロールの隙間から見えた栓に目が行った
「(ガムテープ?この栓を止めていたのか)」
確かに栓を覆うようにガムテープが張ってあった

「ねえ、久保さんの奥さんってどんな人だったの?」
コナンがはるみさんに聞いてみるが
「ごめんなさい、私久保さんの奥さんのことはあまり知らないの、
結婚してすぐ引退したから……ただ厳しくて、とつても怖い人み
たい」

「（はは、鬼嫁ってやつか）」

「気になるのはこのガムテープ」

コナンが風呂桶にぶら下がって栓を覗き込むが

「こら坊主！」

横溝警部につままれてしまった

「まったくめてーは」

「ねえ横溝警部！発泡スチロールの下にガムテープが」

「あ？ガムテープ？」

コナンの言葉で横溝警部も気になったらしく覗き込む

「おい！ちよつと誰か来てくれ、発泡スチロールどかすぞ」

警官が二人がかりで発泡スチロールを運び出した、風呂桶の底にぴたりとはまっていたのでどかすのは大変だった

「ああ、確かにガムテープで栓を覆ってるな」

そう言っつて横溝警部が栓を抜こうとすると割とあっさり抜けた

「ん？特に変わったところは」

「（あれ？この栓……………）」

横溝警部は何も気づかなかったが、コナンは栓についた異変に気付いた

「事情聴取おわりましたよ」

鶴見さん、木宮さん、前田さんが部屋から出てきた

「あれ？近藤さんは？」

「手間取っているみたいですよ、あの人機械音痴だから」

「一人だけ電子切符持ってないんですよあの」

そう言っつて自分の切符をぱたつかせる前田さん

「（どう考えても電子切符のほうが簡単だろ、どんだけ機械弱いんだよ、つーかそんなんでよくテレビのスタッフ勤まるなあ）」

あきれれるコナンであったが

「（待てよ……）」

今のやり取りで何か思いついた様子

「はぁー、たいへんだったあ」

「だから電子切符を持っておけばいいのに、大体青葉台からなんて切符買うのも大変でしょう」

ようやく事情聴取から解放されたらしい近藤さんはぐったりしていた

「あれ？コナン君いなくなってる」

「あら本当、どこいったのかしら」

その一方でコナンがいつの間にかいなくなっていることに気づく蘭とはるみさんだった

一方コナンはなぜか小田急の時刻表を見ていた

「思った通り、この方法なら履歴を残さず町田と相模大野を行き来できる………これではば全員が容疑者だ」

「ねえ」

またコナンがはるみさんのところに何か聞きに来た

「コナン君？」

「どこ行つてたの？」

「ちよつとね、それよりはるみさんに聞きたいことがあるんだけど」

「なに？」

「町田駅に集合した時、ほかの人たちがいつ来たか覚えてる？」

コナンが奇妙なことを聞いてきたので最初ははるみさんも首をかしげたが

「そうね、私は一番最後だったけど、スタッフの人たちは撮影の準備で早めに来ていたわ、そういえば久保さんも早めに」

「それじゃあ、一番最初に来たのは？」

「久保さんだよ」

コナンの質問に前田さんが答えた

「とても真面目な人でね、いつも撮影スタッフより早く来るんだ」
「（やっぱりそうか、間違いない、犯人はあの人だ）」
果たして犯人は一体

答え

「さて、どうしたものか」

小五郎と横溝警部が風呂場で考え込んでいると

「（さあ、出番だぜおっちゃん）」

と、いつも通り小五郎を眠らせようとしたが

「すみません」

横溝警部に聞きたいことがあってやってきたはるみさんのズボンの後ろポケットに刺さってしまった

「（げ！前にもこんなことが………て言うかなんではるみさんも眠くならないんだ？）

「長引くんでしたら事務所に連絡して今日の仕事キャンセルしたいんですけど」

「かまいませんよ」

「（ああ、携帯に当たったのか）」

だが今ので落ちた針を見てみると携帯に当たったためか針が折れてダメになっていた、これでは使えない

「（仕方ない、ちよつとずつヒントを出すしかないか）」

あきらめてコナンが現場に入り込んだ

「ねえ横溝警部、あの栓穴があいてなかった？」

「穴だあ？」

「さつき見せてもらったとき小さい穴が空いてたの僕見たんだ」

「ん〜、おい！もう一遍発泡スチロールをどかさず」

横溝警部が改めて栓を見直してみると

「確かに、小さくて見難いが穴が開いてやがる、貫通してガムテープでふさいであるみたいだな」

「でもなんでそんなことを」

「そーだよね、そんなことしたらお湯が抜けちゃうもん」

「お湯が……抜ける!?」

コナンの一言で二人とも何か気付いたらしくガムテープを入念に調べ始めた、すると

「やっぱりそうだ、べとべとして気付かなかったがほとんどやられてる」

「こんなんじゃほとんどくつつかねえな」

ガムテープの裏側がべつとりしていた

「おい!ちよつと容疑者連中ここに集めてくれ、それと誰かあれだ、小田急の時刻表持つてこい」

横溝警部が時刻表を見ていると警官の一人が容疑者たちを連れてきた

「一体どうしたんですか刑事さん」

「まさか犯人が!」

「ああ、わかつたとも」

時刻表を閉じながら振り返る横溝警部

「久保さん、あんたが犯人だつてことがな」

「これをみな、風呂の栓に穴をあけて細工してある、こんなことできるのはここの住人である久保さん、あんただけだ」

「そんな……栓に穴をあけてなんになるつて言つんですか」

「時間差トリックですよ」

小五郎が後ろから呟いた

「あの発泡スチロールは被害者の体を浮かせるためのものだったのさ」

「まずあなたは害者をクロコホルムかなんかで眠らせてめいっばい水をためた風呂桶に浮かばせた、発泡スチロールの上に乗せてな」

「時間がたつて水がなくなつてくると、体が沈んでいき被害者の首に巻きつけたロープが引つ張られて……」

「でも、穴のあいた栓じゃお湯をためるのに時間がかかってしまうんじゃ」

はるみさんの指摘したとおり
栓に穴が開いた状態では注いだ状態のまま水が少しずつ抜けてしま
うが

「ガムテープですよ」

「ガムテープで穴をふさいだんだ、水に弱いガムテープは次第に粘
着力を失いはがれるが」

「水が抜けてくれば発泡スチロールでおされてまた元の状態に戻る
ってことだ」

小五郎と横溝警部が交互に説明していく

「ですから私は、その日はこの家に来ていないんです、電子切符に
も履歴が」

「そんなもん普通の切符を買えばいい」

久保さんが否定すると横溝警部がすぐ切り返した

「切符にはあなたの指紋と履歴が残っちゃうが、終電を過ぎれば回
収されちゃう、害者が殺された日にあなたは撮影で箱根に行って一
泊したからな、その間に切符は回収されちゃって、もう残ってない
って算段だ」

つまりこういうことだ

久保さんは早めに健康ランドを出て電子切符を使わず通常の紙切符
で電車に乗り自宅にやってきた

そして先ほどのトリックを用意してすぐに戻り、町田駅で何食わぬ
顔でスタッフと合流した

そして水がなくなり被害者の体が沈んで首を絞められるころには久
保さんは電車に乗っているということだ

「切符はその日のうちに回収されちゃったしガムテープなんかにも
指紋は残らねえ」

「でも久保さん、あなたみたい有名な有名人が顔を見られずに人の多い
駅を歩くのは無理だ、必ず目撃者がいる、それにこのトリックは時

間がかかる、被害者が途中で目を覚ます可能性が高い、つまりあなたはロープか何かで被害者を縛っていたはず、そのロープは警察が来る前に処分したんだろうが、探せば見つかる……罪を認めちゃくれませんかね」

小五郎の言葉で久保さんはうつ向いた

「ふっ、ロマンスカーであなたに出会ったのがそもそも不運でしたか」

「でもどうしてですか久保さん！」

うつ向いた久保さんに近藤さんが問いかける

「余りに変わり果ててしまった妻に……耐えきれなくてね」

久保さんはそう呟くと語り始めた

「知ってますか、妻は昔、清純派の女優だったんですよ、でも私と結婚して、生活に余裕ができると、貧乏な生まれだった彼女の欲望は爆発した」

「あれもほしいこれもほしいと、金におぼれ、かつての純粋な笑顔をなくしてしまった」

「今の厳しい性格も、独占欲がもとで生み出してしまったのか……」

……

「妻の変わり果ててしまった姿に、我慢できなくなってしまう、結局あの清純な笑顔を私は……みずから消してしまっただけですが」

「せいじゃ、後は署のほうで聞こう」

そうして犯人の久保さんは連行された

数日後、阿笠博士の家で

コナンと蘭、そして灰原はこの前の事件のニュースを見ていた

「私もあんな風になっちゃうのかな」

ニュース画面で流れたかつての久保さんの奥さんの映像を見て悲しげにつぶやく蘭

「（蘭……）」

「大丈夫」

そんな蘭の声を聞いて灰原が呟いた

「愛情を持ってしている限り、人は人であり続ける、かわらないやさしさがあるならきつと……………」

そんな灰原の言葉に安心したのか蘭は笑顔だった

「そうだね」

「やさしさねえ……………」

と、コナンがジト目で見るのを感じたのか

「何？」

不機嫌そうに睨み付ける灰原

「い、いや別に」

思わずたじろぐコナンだった

「怖えーんだよ」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6330s/>

特急列車のアリバイ

2011年10月7日22時15分発行